

『うたかたの人魚姫』

著：弓月あや

III：北沢きょう

(一成様……この人が一成様……)

どうしよう。しのは思わず俯いてしまった。

この人が一成でも、やはり自分の存在を知ってここに来たようにとても思えないし、自己紹介していいとも思えない。てっきり男妾がいることを承知した「道楽息子」が、自分を弄(もてあそ)ぶために、庵に来るとばかり思っていたのに。

目の前の青年は、藤間が言っていたような、遊興に現(うつつ)を抜かず人間には見えなかった。見たことがないぐらい美丈夫だし、清潔感のある雰囲気は、遊びで身を持ち崩す人ではないと思わせる。切れ長の瞳は知性を感じさせ、そして凜(り)々(り)しい。

こんな人だったなんて。想像と全然違っている。もっと乱れた、澱(よど)んだ空気の持ち主だと思っていたのに。

「おまえの名は、何と言う」

「あの、……しの、です」

唐突に訊(き)かれて、反射的に答えてしまった。

「しの。きれいな名前だ。おまえによく似合う」

思いもかけないことを言われて、恥ずかしくなる。いや、それよりもこんなところで話をしていたのがバレたら、藤間にどんなお仕置きをされるだろう。

そわそわしているしのとは対照的に、一成は好奇心を隠さない子供みtainな瞳で、こちらを覗(のぞ)き込んでくる。

「おまえは外国人の血が入っているのか」

「が、外国人なんて……っ。曾祖母がぼくと同じ髪と眼の色をしていたそうです」

唐突な問いに、しのは慌ててかぶりを振った。外国人なんて、会ったこともない。その反応をどう思ったのか、一成は手を伸ばすとこちらへと寄せてくる。反射的に体がびくっと竦(すく)んだが、一成はさらりと銀色の髪に触れてきた。

「ふうん。先祖がえりというやつかな。とても美しい髪だ」

信じられない言葉に啞然として、しのは一成を見つめる。

「……美しい？」

「日本ではあまり馴(な)染(じ)みがないが、欧米ではこの銀髪をプラチナブロンドと呼ぶ。その瞳も初めは驚いたが、まるで貴婦人がつける宝石のようだ」

「ほうせき？」

「女性が帯留めや簪(かんざし)に珊(さん)瑚(ご)や真珠を使うだろう。あれと同じように、鉱石から取り出した宝石という輝石を、西洋の女性は愛用している。その中にルビーという紅玉があって、血のように紅い石なんだ。おまえの瞳は、その石に似ている」

「……るびい……」

初めて聞く言葉は、ころりときれいだ。それに、貴婦人を飾る石と言ってくれた。

今まで、気持ちが悪いか、魔性の眼だとしか言われなかった瞳が、そんな貴婦人

たちがつける石と同じ色などと言われたことが驚きだった。

自分が生まれたせいで、両親は村を追われ、山の中に逃げ込むしかなかった。

両親はやさしい人たちで、どんな姿かたちであろうと、「しのはかわいい子だ」と言っ
て育ててくれたけれど、他人からこんな賞賛を受けるなんて、思いも寄らなかった。

それも、鷹司公爵家の嫡男である、こんな立派な人に。

どうしていいのかわからなくなって、しのは唐突に踵を返すと、庵に向かって走り出
した。

「え？ きみ、しの！」

突然走り出したしのに驚いたのか、怪(け)訝(げん)そうな一成の声が背後からかけ
られたけれど、振り返ることができない。顔が真っ紅になっているのが分かる。

「しの！」

庵の木戸を開き中に入ろうとすると、さらに大きな声が名前を呼んだ。恐る恐る振り
返ると、思いもかけないほど朗(ほが)らかな笑顔を浮かべた一成が、こちらを見つめ
ている。

「明日、またここに来ていいか」

一成の言葉の意味が掴(つか)めず、しばらく無言だったしのは、先ほどよりも頬が紅
らむのを感じた。大きく頷いてから木戸を閉めると、また背後から大きな声がする。

「今日は驚かせて悪かった。では、明日の午後にまた会おう！」

庵の引き戸を慌てて閉め、部屋に入ると走って連(れん)子(じ)窓(まど)の障子をこっ
そりと開いた。一成はしばらく庵を眺めて、それから屋敷へと戻っていった。その後姿
は、姿勢がよく、とても軽快だ。

しのは自分の胸が太鼓のように鳴り響くを感じる。とてもたくさん走ったときのよう
に、どきどき鼓動を打っている。

どうしてこんな気持ちになるのか、少しも分からなかった。

□□□

翌日、本当に午後になると一成は庵にやってきた。しかも驚くような手土産を持って。
「これが昨日話した紅玉。きれいだらう」

「これが、るびい？」

一成が差し出したのは、きらきらと光りながら人を魅了する真紅の石だった。

「すごい……きれい……」

庵のちいさな濡(ぬ)れ縁(えん)に並んで座り、その石を見ていたしのは、太陽に透か
してみた。

透き通った紅なのに、ただ美しいだけではない石。どこか昏(くら)く、人を引き込もう
としているみtainな、そんな魔力がある宝石。

「おまえの眼の色に、そっくりだ」

一成は口元に笑みを浮かべてそう言うが、禍(まが)々(まが)しいと村人たちに詰(な
じ)られている元凶である紅い瞳を、しのは、まじまじと見つめたことなどない。

紅い石は確かに美しい。だけど、紅い瞳を美しいと言ったのは、一成だけだ。

「ありがとうございました。……とても高価なものなんでしょう？ 触らせてもらって、嬉
しかったです」

その石を一成に手渡すと、彼はすっと立ち上がり、石についていた鎖を、しのの首に
巻きつけた。おまけに「うん、よく似合う」と満足そうに笑っている。

「あ、あの……っ？」

「これはおまえにあげようと思って、銀座の宝石商に持ってこさせたんだ。とても似合う。思ったとおり、おまえの白い肌をととも引き立てる」

「そんな、そんなの駄目です！ こんな高価なもの、絶対いただけません」

「しかし返されても困る。私は首飾りなどつけない」

「では、つける方に差し上げてください。こんなものをいただいたら、叱られます！」

必死で言うしのに、一成はおかしそうに笑うだけだ。

「ああ、藤間か。確かにあれが怒ると怖い。無表情のまま静かに怒るからな。おお、私は藤間に怒られるのだけは御免だ」

そう言うと、一成は濡れ縁から立ち上がると、さっさと木戸を開けて出て行こうとする。

「一成様！」

「また明日、同じ時間に来るよ。じゃあね」

飄(ひょう)々(ひょう)と歩いていた一成は一度だけ振り向き、立ち尽くしているしのに手を振ると、もうこちらを振り返ることもなく、屋敷に戻っていった。

その背中が木立の陰に消えるまで見守っていたが、一人になり、首飾りにもう一度触れてみる。あの美しい宝石が自分の首元を飾っているなんて、信じられない。

そうだ、庵の中には鏡台があった。しのは普段使ったことがない鏡を思い出し、庵へと戻った。鏡にかけられている布を外し、仄暗い部屋の中で自分の姿を見る。

紅い大きな瞳。紅い首飾り。それは酷く艶(なま)めかしく白い肌に映えた。

『おまえの眼の色に、そっくりだろう』

あの人の声。笑ったときにできる目じりの皺。長くてきれいな指。清潔なうなじと、それに続く厚く逞しい胸。考えただけで、ドキドキする。

……どうしてこんな気持ちになるのだろう。

『とても美しい髪だ』

気づけば、しのの真っ白なはずの頬は薔(ば)薇(ら)色に染まっていた。どうしてこんなに頬が赤くなっているのか。恥ずかしくて恥ずかしくて、慌てて鏡台に布をかけなおし鏡を隠した。

明日も会える。

そう思うだけで、胸の高まりは増していくばかりだった。

本文 p37～43 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>